

福岡県

街道 1

積極的特性ではないが、福岡県には他県にはない形態の石桁橋が2橋見られる。高良山御手洗橋（久留米市、享保年間 or 安永元（1712）、県有形）**A**と五穀神社の石橋（久留米市、文化3（1806）、市有形）**B**である。何れも、橋中央の円柱橋脚上に石梁を載せ、その上に別途橋面石を置くという二重構造になっている。推測だが、御手洗橋（下の写真）の場合、橋脚本数を偶数としたため中央で支持できなくなり、敢えてこのような構造にしたのではないかと思われる。



五穀神社の石橋も同一構造だが、石梁に亀裂が入り、それを支えるため梁中央直下に RC 柱が挿入されている。この状況を見ると、御手洗橋で生み出された二重構造は、石梁に過度の曲げモーメントを生じさせ、この一点から橋全体を危険に陥れる可能性がある「失敗」構造と断言できる。5径間ではなく6径間の普通の石桁橋にすれば何の問題も生じなかったはずなので、不可思議な事例である。

街道 2

福岡の最大の特徴は、境界石が全国でも飛び抜けて多く、高さも最大級のものが揃っているという点にある。建立年代も 17 世紀末から幕末まで万遍なく造られ続けた。時代順に代表的なものを示すと、山本・御井郡境石（久留米市、元禄8（1695）、市有形民俗）**A**、湯谷の国境石1・2（大牟田市、江戸初期?、県有形民俗）**A**、三国境石（小郡市・筑紫野



市・基山町、文化2（1805））**A**、荻浦の領境石（糸島市、文政元（1818））**A**、高見の国境石1（北九州市八幡東区、天保5（1834）、市史跡）**A**、原田の国境石（筑紫野市、天保5・6（1834・35））**A**、乙隈・馬市の国境石（小郡市、19世紀中頃以前）**A**などである（上の写真は、乙隈・馬市の国境石）。

舟運 1

九州最大の運河が、遠賀堀川（中間市・水巻町・北九州市、宝暦12（1762））**A**である。黒田長政が元和7（1621）に着工した時点では遠賀川の洪水対策が目的だったが（長政の死により中止）、元文2（1737）に再着工された際は、遠賀川流域から若松の米蔵への舟運、折尾村他の新田の灌漑用水確保が主目的とされた。運河は宝暦12（1762）に完成するが、取水部の中島の唐戸が2度決壊する。そのため、場所を変更し、岡山に使役頭・一田久作を派遣して吉井水門の構造を研究させ、翌年に中間の唐戸（中間市、宝暦13（1763）、県史跡）**A**を完成させた。唐戸の特徴は二重扉だが、それは、吉井水門の閘室の前後に設けられた第一扉と第二扉を参考に“洪水防御”を高めようとした結果だと思われる。





遠賀堀川は、その後、中間の唐戸周辺が湿田化したため、遠賀川からの取水を上流側に変更し、取水口付近に寿命の唐戸（北九州市八幡西区、文化元（1804）、市指定）**B** が造られた（ここでも、二重扉が再現された）。

舟運 2

福岡は、鹿児島島の奄美諸島と同様、全国でも稀な碇〔いかり〕石の集積地である。後者が中国～琉球～奄美を結ぶ交易の歴史であるのに対し、福岡市周辺の碇石は弘安の元寇の際に元の軍船が使用していた碇石だと一般には解釈されている。ただ、多数の碇石の中には、平安期の日宗貿易時の宗船の碇もあるのではないかと指摘されている。福岡地区で最大の碇石は上川端町〔櫛田神社〕の碇石（福岡市博多区、10-13 世紀、県考古資料）**B** である。



農業 1

農業で筆頭にあげるべきは、日本最古の灌漑水路と言われる裂田溝〔さくたのうなで〕（那珂川町、4 世紀の可能性）**A** である。『日本書紀』に、神功皇后が新羅遠征にあたり現人神社の神田を灌漑するた

め開削した旨の記載があり、かつては伝説と思われていたが、現在では周辺の発掘調査から 4 世紀頃の築造は正しいと推定されている。裂田溝で最も印象的な場所は、溶岩流の台地を開削した安徳台の狭窄部で、1600 年の時を超えて見る者を圧倒する迫力がある。唯一残念なことは、補強用のアンカーの丸い穴跡が丸見えである点だが、時間が経てば見えなくなると期待される。



農業 2

九州で最大の干拓堤防は、慶長本土居（柳川市、慶長 7（1602）、市史跡）**A** である。筑後国主・田中吉政の重要な事績とされ、延長 25 キロもある締切堤で、僅か 3 日で完成したと伝えられる（実際には、それまで個々にあった潮受堤防を連続化したのでは、と考えられている）。現状は、ほとんどの区間が道路拡幅で平坦化され、土居跡が視認できるのは僅かに過ぎない。

農業 3

福岡県でしか見られないユニークな農業施設に、廻水路群（黒木町、1762-1844）の存在がある。矢部川の右岸・久留米領と左岸・柳川領の“仁義なき”取水争いの結果であり、わが国の農業史上でも珍しい事象と言える。発端は宝暦 12（1762）、柳川用水を取水する柳井藩の唐ノ瀬堰の上流に久留米藩が惣河内堰を造り、そこから唐ノ瀬堰の下流に直接水を流す惣河内廻水路を掘ったことで、柳川藩では同年、対抗措置として上流に込野堰とその廻水路を造った。その後も、寛政 6（1794）に久留米藩が黒木堰と廻水路、文化 11（1814）に柳川藩が三ヶ名堰と廻水路、



撮影：馬場俊介（2009.11.22）

天保 15 (1844) に久留米藩が花巡堰と廻水路というように、“相手の堰の上流に新たな堰を造り、相手の堰の下流に水を流す廻水路を掘る”という行為をくり返した。堰は最上流の 2 つの堰（花巡・三ヶ名）を除き更新されてしまったが、廻水路は何れも現役で水を通して

いる。上の写真は、写真の下半分に写っている水路が久留米藩の花巡廻水路の末端部、写真の上方の緑の部分が柳川藩の三ヶ名堰である。廻水路が堰を迂回して右方にある矢部川に水を誘導している状況が見て取れる。

産業 1

熊本藩では、寛文 4 (1664) から櫨〔ハゼ〕が特産品奨励として植栽されるようになったが、久留米藩でも木蠟作りのため櫨の植樹を奨励した。鹿柳坂曾根の櫨並木（久留米市、享保 15 (1730) 以降、国天然）**A** は、本場・熊本で最も著名な菊池川堤防櫨並木よりも連続性があることから、日本一の櫨並木として知られている。独特の紅葉が珍しいため、現在では 11 月下旬に開催される「柳坂ハゼ祭り」が人気を博している。



提供：久留米観光コンベンション国際交流協会

防災 1

福岡県の治水遺産で筆頭にあげるべきは、瀬高の楠木土居（みやま市、元禄 8 (1695)、国天然）**A** であろう。愛媛県大洲市の肱川榎樹叢と並ぶ、全国の二大水害防備林である。柳川藩主から矢部川治水の命を受けた普請役の田尻惣助・惣馬親子が、北山の千間土居より船小屋地区までの堤防大改修を行った際に植栽したもので、樹齢 300 年を超える楠が 500 本以上、長さ 920m、最大幅 130m にわたって続く光景は見事としか言いようがない。



撮影：馬場俊介（2009.11.21）

少し話は逸れるが、最終的に楠を植えたのは子の惣馬である。彼の工事の仕切り方は厳しく「鬼」と恐れられ、悪評は藩主・立花鑑虎にも届いたと言われる。土木巧者と言われた武士の多くは農民を大切にしているが、高知の野中兼山と田尻惣馬は例外的に峻厳な姿勢を貫いた。なお、惣馬が矢部川に植えた楠は、千間土居の楠（立花町、元禄 8 (1695)）**A** でも 2 キロにわたり断続的に残っている。

防災 2

大河川の治水という点では、九州最大の河川・筑後川の荒籠（水制）が有名であった。筑後川の荒籠群と比肩できるものは全国でも木曾川の猿尾群しかないが、後者が単に水流を制御し堤防を守る目的であったのに対し、筑後川では水の勢いを対岸の他藩に向かわせたことから、水争いの原因にもなったという点で大きく異なっている。代表的な荒籠は、県内では、久留米藩が築いた道海島の百間荒籠（大川市、明暦 2 (1656)）**A** と、柳河藩が築いた永松荒籠（柳川市、江戸中期）であった。前者は建設当時 560 m もあったと言われるが、現状は僅か 29m であるし

(下の写真)、永松荒籠は現堤防の下にほとんど埋ま
ってしまっている。長さ 360m 石田猿尾をはじめ多
くの水制の残る木曾川とは大違いで、明治期に同じ
デ・レーケが河道整備をした河川とは思えない。



防衛 1

筑前は大和と並んで歴史の古い国であり、日本最
古の農業用水以外にも、古代の大構築物が残ってい
る。それが、唐と新羅の攻撃に備えて築かれた大土
塁・水城(太宰府市、天智 3 (664)、国特別史跡) **A**
である。長さ 1.2 キロ、幅 15m、海側に幅 60m の
濠が造られていたことが水城の呼称の由来である。



防衛 2

もう一つの歴史的に重要な防衛施設が、蒙古軍の
最初の侵攻、いわゆる文永の役を受けて、博多湾沿
岸一帯に築かれた元寇防塁である。今津から香椎ま
での海岸線に築かれた 20 キロにも及ぶ高さ 2m、幅
2m の堅固な石塁は、2 度目の大規模な侵攻・弘安
の役の際に、大いに効果を発揮したとされる。この
巨大な防塁は、今ではほとんど姿を消してしまっ
たが、福岡市内 7 ヶ所に部分的に残存し、中でも、生

[いき] の松原 (福岡市西区、建治 2 (1276)、国史
跡) **A** と今津 (同前) **A** は保存状態が良好である
(下の写真は生の松原)。



防衛 3

福岡県の最後は、観光地としても有名な柳川城の
城堀 (柳川市、慶長 5-14 (1600-09)) **A** である。石
田三成を捕らえた功により、慶長 5 (1600) に筑後
一國 32 万 5 千石を与えられ柳川城に入った田中吉
政が、防衛と灌漑を目的として、城と城下町を囲む
ように掘ったものである。この水路網は、昭和 50
代に市の一職員の献身的な努力により荒廃から救わ
れ再生した。この話は映画にもなったが、水路を築
いた田中吉政の系譜についてはあまり知られていな
い。田中吉政 (1548-1609) は近江の国の出身で、
豊臣秀次の筆頭家老格として八幡城下の町割を行な
い、その際に全長 6 キロの八幡堀を開削した。天正
18 (1590)、田中吉政は小田原征伐で功を上げ、徳
川家康の出身地である三河国の岡崎城主として 5 万
7400 石の所領が与えられたが、ここでも新たな町割
を行い、田中堀を開削している。田中吉政という一
個人の影響の大きさを示している。

